

# イエシュア誕生の最初の告知が なぜ羊飼いたちだったのか、その必然性

## ベレーシート

●ベツレヘムでイエシュアが誕生したことを御使いたちが最初に知らせたのは、なんと「羊飼いたち」でした。なにゆえに、「羊飼いたち」だったのでしょうか。そこには深い理由があるはずです。その必然性について聖書全体から瞑想してみたいと思います。

【新改訳 2017】ルカの福音書 2 章 8～20 節

- 8 さて、その地方で、**羊飼いたち**が野宿をしながら、羊の群れの夜番をしていた。
- 9 すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。
- 10 御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。見なさい。私は、この民全体に与えられる、大きな喜びを告げ知らせます。
- 11 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。
- 12 あなたがたは、布にくるまって飼葉桶に寝ているみどりごを見つけます。それが、あなたがたのためのしるしです。」
- 13 すると突然、その御使いと一緒におびたしい数の天の軍勢が現れて、神を賛美した。
- 14 「いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。」
- 15 御使いたちが彼らから離れて天に帰ったとき、**羊飼いたち**は話し合った。「さあ、ベツレヘムまで行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見届けて来よう。」
- 16 そして急いで行って、マリアとヨセフと、飼葉桶に寝ているみどりごを捜し当てた。
- 17 それを目にして**羊飼いたち**は、この幼子について自分たちに告げられたことを知らせた。
- 18 聞いた人たちはみな、**羊飼いたち**が話したことに驚いた。
- 19 しかしマリアは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。
- 20 **羊飼いたち**は、見聞きしたことがすべて御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

## 1. ベツレヘム近郊にいた羊飼い

●ルカの福音書によれば、イエシュア誕生のニュースを最初に知らされたのは羊飼いたちでした。ここで登場する羊飼いたちの存在に神の秘密が隠されています。ルカは 2 章 8 節で、「さて、この土地に、羊飼いたちが、野宿で夜番をしながら羊の群れを見守っていた」と記しています。「この土地」とはいったいどんな土地なのでしょう。どこの場所なのでしょう。御使いの知らせを聞いた羊飼いたちは 2 章 15 節で「さあ、ベツレヘムに行って、・・・この出来事を見て来よう。」と言っていますから、「この土地」

というのはベツレヘムではないことが分かります。かといって、「急いで行って、・・捜し当てた」とありますから、それほど遠く離れてはいない場所です。そもそも、羊飼いたちはどこにいたのでしょうか。一見、小さなことのように思われるかもしれませんが、そのような小さなことにこだわると、不思議と神の隠された秘密が見えてくることがあるのです。

●創世記 35 章 21(16~21)節の記述に「ミグダル・エーデル」(=羊の群れの塔)と呼ばれるところがあります。「ミグダル」(מִגְדָּל)は「塔、やぐら、とりで」を意味し、「エーデル」(עֵדֶל)は「家畜や羊の群れ」を意味します。つまり、「ミグダル・エーデル」(מִגְדָּל עֵדֶל)とは「羊などの群れを管理する塔」のことです(右写真参照)。「ミグダル・エーデル」のあるこの地域(ベツレヘムの周辺)は、約束の地として与えられる前のヤコブの時代から、羊の世話をする場所として知られていたのです。救い主がお生まれになるという預言が与えられる前から、ベツレヘムは特別な場所として、神が確保されていた場所なのです。



●イスラエルでは古くからエルサレムでいけにえがささげられていましたが、そのいけにえとなる羊は「傷のない羊」でなければなりません。つまり、品質の良い、良く管理されて育てられた最高の羊が必要とされました。そうした羊を育てる場所がベツレヘム近郊にあったのです。やがてはエルサレムにおいて神殿が造られ、そこで礼拝するために多くのいけにえとなる羊が必要でした。つまり、「ミグダル・エーデル」はそのようないけにえを供給する適所であったのです。

●ユダヤ人で新約学者であるイーダーシャムという人は「イエスの生涯と時代」(The Life and Times of Jesus the Messiah)という本の中で、ベツレヘム郊外にあるミグダル・エーデル(見張りの塔)の傍の羊の群れは、普通の群ではなくて、エルサレムの神殿で捧げるための特別な群れであること。羊飼いたちも特別な使命のための人々で、しかも年間休み無く羊を見守っていたことを指摘しています。また、普通の羊飼いは夕方になると羊を囲いの中に入れて、自分たちは天幕の中で寝てしまうのが普通でした。夜に焚き火を焚きながら、野宿してまで羊を見守るということは、尋常なことではなく、むしろ特別なことでした。「傷のない羊」を育てるために、品質管理を何よりも自分たちの使命とする忠実な羊飼いだっただからこそ、「野宿で夜番をしながら羊の群れを見守って」(ルカ 2:8)いることができたのです。主の使いは、そのようなベツレヘム近郊にある「ミグダル・エーデル」にいる羊飼いたちのところに現われたのです。しかし、それだけでは、イエシュア誕生のニュースが彼らに最初に伝えられた必然性にはなりません。より深い、神のご計画が隠されていたのです。

●「救い主」誕生の知らせを聞いた羊飼いたちは、急いでベツレヘムに行き、自分たちをはるかに越えた偉大な羊飼いとなる方と対面したことになります。しかもその方は、やがて人類の罪の身代わりのいけにえとなるべき「傷なき小羊」でした。「ミグダル・エーデル」にいた彼らが、ベツレヘムで真先に、まことの大牧者であり、しかも同時に「傷なき小羊」として死なれる幼子イエシュアを礼拝したことは、神の救いのドラマにおける驚くべき啓示だと言えます。しかし、このことを彼らが正しく悟ったかどうかは、聖書では明らかにしていません。しかしイエシュアの母となったマリアだけが、「これらのことをすべ

で心に納めて、思いを巡らしていた」(2:19)とあります。「思い巡らす」と訳されたヘブル語動詞は「ハーシャヴ」(חֲשַׁב)で、これは瞑想用語のひとつです。マリアがどのように瞑想したのかは記されていませんが、私たちが今こうして、イエシュアの誕生のニュースが、なにゆえに羊飼いたちに最初に伝えられたのかと考えていることが「ハーシャヴ」なのです。つまり、神の緻密なご計画の全体像から、「思い計る」ことをしているのです。これは普通の「ディボーション」とは異なり、自覚的な訓練が必要です。忙しくしている方々には難しいことですが、この瞑想の訓練を通して、表面的には気づかない霊的な宝を捜し出すことが求められているのです。この働きをするためには、神からの召しをいただかなければなりません。

## 2. イスラエルの歴史における「羊飼い」

●イスラエルにおいては、羊飼いは必ずしも身分の低い、見下げられた職業ではありません。イスラエルの歴史において登場する人物はみなすばらしい羊飼いでした。アベル、アブラハム、イサク、ヤコブ、モーセ、ダビデなど、彼らはまさに羊飼いであり、人々から尊敬されていた指導者でした。ヤコブが愛した妻ラケルも羊を飼う者でした。

●羊のいない羊飼い、逆に羊飼いのいない羊というのも成立しません。なぜなら羊は羊飼いなしに、単独としても、群れとしても生きることはできないからです。良い羊を育てることは、良い羊飼いにしかできません。「ミグダル・エーデル」の羊飼いたちが、やがて真の良い羊飼いとなられるイエシュアとベツレヘムにおいて出会わせられたのは、神のドラマにおけるすばらしい出来事です。

## 3. 羊飼いと羊は、神と人とのかわりを啓示する型

●聖書では、「羊飼いと羊」は「神と人」との関係を表わす型です。神の御子イエシュアは、「羊飼い」でもあり、また「羊」でもあるという存在です。聖書で初めて「羊」(群れとしての羊で「ツォーン」צֹאן)が登場するのは創世記4章2節、そして聖書の最後に登場するのは黙示録22章3節です。もともと、黙示録の羊はすべて「子羊」(「アルニオン」ἀρνιον)という「勝利の小羊」を意味しています。新天地では、御父と御子という呼び方ではなく、「御座におられるお方と子羊」という言い方がなされます。

### (1) アベルがささげた「羊」の最良の初子

【新改訳改訂第3版】創世記4章1～7節

- 1 人は、その妻エバを知った。彼女はみごもってカインを産み、「私は、【主】によってひとりの男子を得た」と言った。
- 2 彼女は、それからまた、弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。
- 3 ある時期になって、カインは、地の作物から【主】へのささげ物を持って来たが、
- 4 アベルもまた彼の羊の初子の中から、それも最上のものを持って来た。【主】はアベルとそのささげ物とに目を留められた。

- 5 だが、カインとそのささげ物には目を留められなかった。それで、カインはひどく怒り、顔を伏せた。
- 6 そこで、【主】は、カインに仰せられた。「なぜ、あなたは憤っているのか。なぜ、顔を伏せているのか。
- 7 あなたが正しく行ったのであれば、受け入れられる。ただし、あなたが正しく行っていないのなら、罪は戸口で待ち伏せして、あなたを恋い慕っている。だが、あなたは、それを治めるべきである。」

●創世記 4 章で、アダムとエバの二人の息子たち(カインとアベル)が登場します。アベルは「羊を飼う者」となり、カインは「土を耕す者」となりました。それぞれが、神にささげ物をする話が記されています。ところが、神は弟アベルとそのささげ物に目を留められますが、カインとそのささげ物には目を留められませんでした。この違いは何なのでしょう。このことでカインは妬み、アベルを殺すという出来事に発展します。なにゆえに神はアベルのささげ物にのみ目を留められたのでしょうか。それについては、「牧師の書齋」の中にある「ヘブル・ミドゥラーシュ」のタグの中にある第 10 回例会『「カインとアベルのささげ物」に隠されている神の真意」に詳しく記していますのでご覧ください。

●「なにゆえに神は、アベルのささげ物にのみ目を留められたのか」という設問の要点はこうです。神がアベルのささげ物に目を留められたのは、そのささげ物が**神のご計画と深くかかわるものであったから**だと言えます。「目を留められた」と訳されたヘブル語の動詞は「シャーアー」(חָשַׁף)で、神が驚きをもって目を留められたというニュアンスの動詞です。つまり**神の驚きとは、神がアベルのささげ物の内に、神ご自身がこれからなそうとすることが先取りされているのをご覧になったゆえに、驚き、喜ばれたのだと理解することができます**。反対に、カインは神のご計画について訪ねることも、関心を示すこともなかったことが、ささげ物で露呈してしまった感じです。神の関心事よりも、自分に目を留めてくれなかったことの方が彼にとっては大問題だったのです。

●こうした考えは人間中心的世界観(ヘレニズム的思考)の特徴であり、カイン的思考です。反対に、神中心のヘブライズムはアベル的思考です。例えば、あるキリスト教会の方針として、地域のニーズに合った教会とか、人々のニーズに即応した教会という立場を表明している教会があります。一概には言えませんが、地域や人々のニーズに合うような教会を建て上げようとするのは、果たして神が求めておられる神中心のアベル的な思考に基づく考え方なのかどうか、再考する必要があります。神にはなさりたいことがあるという視点と、人が何を求めているのかという視点との違いです。アベルとカインの話は、神にとって何が正しいことなのかを教えている話だと信じます。それゆえ、罪とは神の関心とはずれている状態、的外れであることを意味するのです。

## (2) ささげ物が羊であったこと

●ところで、**アベルのささげ物が「羊」であったことは、神のご計画においてきわめて重要なことでした。****神へのいけにえとなる羊**を表わすヘブル語は「セ」(שֶׁ)です。これは初子の「子羊、羊、子やぎ、やぎ」でもこの語が使われます。初出箇所は創世記 22 章 7 節、8 節で「全焼のいけにえのための羊」として登場します。また、出エジプト記 12 章 3 節と 5 節では「過越のための羊」として登場します。ちなみに、

ヨハネの福音書の「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」の「小羊」もこの「セ」(הֶשֶׁ) が用いられており、イエシュアを指し示していることは言うまでもありません。アベルのささげた羊は、その羊の群れの中から選ばれた「初子」(「ベホラー」בְּכוֹרָה)であり、「初子」(複数)の中でも最上のもので(「ヘーレヴ」חֶלֶב)であったのです。そしてこの「羊」、「初子(長子)」「最上のもので」の概念の中にイエシュアが啓示されているのです。

●また「羊」はレビ記が啓示しているように、**神にささげるきよい動物**であり、また食べることが許されている家畜です。なぜなら、羊は①**反芻する動物**であり、②**ひづめが分かれています**動物だからです。神に受け入れられる動物は、常にこの二つの条件を満たすものでなければなりません。それ以外の動物は皆汚れた動物とみなされます。この二つの条件を満たす動物は「羊」の他に、「牛」と「やぎ」、そして野生の「かもしか」「鹿」の類いです。それらは神に受け入れられる動物であり、神に愛される対象でもあり、神を慕う希求の象徴でもあります。そして、いずれもそれらは神の御子「イエシュア」を啓示しています。

●「**反芻する**」のヘブル語動詞は「上る・登る」を意味する「アーラー」(עָלָה)です。その名詞の語源は「オーラー」(עֹלָה)で、「全焼のいけにえ」を意味します。詩篇 24 篇 3 節に「だれが、主の山に登りえようか。」とありますが、これまでの歴史において、主の山(エルサレム)に登ることのできた者はアブラハム、ダビデ、そしてイエシュアです。その中で自分自身を主の山(=エルサレム)で「全焼のいけにえ」としてささげた人はイエシュアしかおられません。

●また、神にささげる動物は「**ひづめが分かれています**」ことが重要です。なぜなら「ひづめが分かれる」のヘブル語動詞は「パーラス」(פָּרַס)で、「パンを裂く」という意味があるからです。最後の晩餐において、イエシュアはパンを裂いて言われました。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 26 章 26 節

また、彼らが食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福して後、これを裂き、弟子たちに与えて言われた。

「取って食べなさい。これはわたしのからだです。」

●ユダヤ教によれば、アロンの祝祷は両手を前方に肩の高さで伸ばし、右にあるような手の形(扇の形)で祝福したようです。この手の形は「ひづめが分かれた」きよい動物の「型」なのです。とすれば、大祭司アロンの祝祷の手の形は、まさにご自身のからだを裂いていのちを与えるイエシュアを啓示していることとなります。



●以上のような、「全焼のいけにえ」の立ち上る煙は「**なだめのかおり**」として神を喜ばせます。イエシュアは傷なき生涯を送られて「全焼のいけにえ」(雄羊)となられた方です。またイエシュアは「裂かれし主のからだ」と賛美でも歌われるように、「ひづめの分かれた」お方として、ご自身のからだをパンを裂くようにして与え、また罪の赦しのためにご自身の血を私たちの罪のために(一滴残らず)注ぎ出してくださった方です。なぜ、神にささげるいけにえとなる動物が「反芻し、ひづめが分かれ

た」ものでなければならないのか。ヘブル語を知るなら、おのずとうなずける話なのです。

- アベルのささげた羊が「初子」であったということもきわめて重要な事柄です。なぜなら「初子」は、やがて「神の所有(もの)」となることが定められているからです。

【新改訳改訂第3版】出エジプト記 4 章 22 節

そのとき、あなたはパロに言わなければならない。【主】はこう仰せられる。『イスラエルはわたしの子、わたしの初子である。

【新改訳改訂第3版】出エジプト記 13 章 12～13 節

12 すべて最初に生まれる者を、【主】のものとしてささげなさい。あなたの家畜から生まれる初子もみな、

雄は【主】のものである。

13 ただし、・・・あなたの子どもたちのうち、男の初子はみな、贖わなければならない。

- 「初子」の「ペホーラー」(בְּכוֹרָה)には「長子」という意味もあります。「長子」はイエシュアの称号です。御子イエシュアが肉体を持たれたのは、彼につながる兄弟たちの中で長子となるためでした。

【新改訳改訂第3版】ローマ人への手紙 8 章 29 節

なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。

それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。

## ベアハリート

- エルサレムでささげられる「傷のない羊」を飼っていた羊飼いたちに、主の使いによってイエシュア誕生のニュースが最初に伝えられたのはなぜか。それは、彼らこそ、真の「傷のない、完全な羊」となるべき子羊なるイエシュアを、さらには真の大牧者となるべきイエシュアを拝するにふさわしい人たちだと、神が判断されたからではないでしょうか。そこには聖書全体からの整合性があります。そこに、イエシュアの誕生のニュースが羊飼いたちに最初に伝えられたという**神の必然性**があると信じます。

2017.12.23